

令和2年第2回

札幌市教育委員会会議録

※ 非公開に係る議案（議案第2～6号）を除く

令和2年第2回教育委員会会議

1 日 時 令和2年1月24日（金） 10時00分～11時55分

2 場 所 S T V北2条ビル4階 教育委員会会議室

3 出席者

教 育 長	長谷川	雅 英
委 員	阿 部	夕 子
委 員	佐 藤	淳
委 員	石 井	知 子
委 員	道 尻	豊
委 員	中 野	倫 仁
教育次長	檜 田	英 樹
生涯学習部長	鈴 木	和 弥
庶務係員	洞 内	亮
財務係長	田 畑	裕 紀
財務係員	土佐岡	潤
教育政策担当課長	高 橋	俊 範
学校 I C T 推進担当係長	西 澤	俊 之
学校施設担当部長	永 本	宏
学校教育部長	相 沢	克 明
教育推進・労務担当部長	早 川	修 司
教育推進課長	井 上	達 雄
学事係長	茂 木	貴 徳
学事係員	奥 山	玲 太
教育課程担当課長	佐 藤	圭 一
義務教育担当係長	山 下	敦 史
義務教育担当係長	岩 田	悟
義務教育担当係長	高 橋	健 一
児童生徒担当部長	長谷川	正 人
教職員担当部長	紺 野	宏 子
教職員課長	榊 原	直 志
調査係長	石 田	紘
調査係員	菊 地	友美恵
労務担当課長	工 藤	晃 史

労務係長	佐藤友永
労務係員	上田真士
中央図書館長	毛利泰大
総務課長	宮地宏明
庶務係長	松平健次
書記	田中将太

4 傍聴者 3名

5 議 題

- 報告第1号 令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果の報告について
- 報告第2号 令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』育成プラン」について
- 議案第1号 札幌市立義務教育諸学校における学級編制について
- 議案第2号 議会の議案についての市長への意見の申出について
- 議案第3号 議会の議案についての市長への意見の申出について
- 議案第4号 議会の議案についての市長への意見の申出について
- 議案第5号 議会の議案についての市長への意見の申出について
- 議案第6号 議会の議案についての市長への意見の申出について

【開 会】

○長谷川教育長 これより、令和2年第2回教育委員会会議を開会いたします。

本日の会議録の署名は、佐藤淳委員と中野倫仁委員にお願いいたします。

本日の議案第2号から第6号は、議会の議案についての市長への意見の申し出に関する事項であります。

教育委員会会議規則第14条第4号の規定により、公開しないこととしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、議案第2号から第6号までは公開しないことといたします。

【議 事】

◎報告第1号 令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果の報告について

○長谷川教育長 それでは、議事に入ります。

報告第1号 令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果の報告についてであります。

事務局からご説明をお願いいたします。

○学校教育部長 学校教育部長の相沢です。

報告第1号 令和元年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」結果の概要について、私からご報告いたします。

今年度の調査結果につきましては、令和元年12月23日(月)に、スポーツ庁が全国及び都道府県、政令指定都市ごとの結果を発表しております。本日は、札幌市の結果の概要を報告いたします。

それでは、資料1の左側、令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果(小学校)をご覧ください。

まず、表の見方や記号について説明いたします。

初めに表の見方についてですが、表の中に「T(ティー)得点」という表記があります。

ここで用いているT得点とは、全国平均を50点とし、その全国平均値に対して、どのくらい上回っているか、下回っているかをあらわす偏差値のような数値となっております。

例えば、小5男子の「握力」「R元札幌」の欄を見ていただきたいのですが、

「51.6」とあります。これは、全国を1.6ポイント上回っていることを意味します。また、このように全国平均の50点と同じか上回っているものにつきましては、網かけで示しています。

次に、表の二つほど右の長座体前屈の欄をご覧ください。

「49.4」の数字の前に白星印がついています。これは、前年度のH30札幌の得点の49.1を上回っていることを意味します。このように、前年度に比べて得点が増しているものは、白星印で示しています。

次に、表の一番右端の欄をご覧ください。

「体力合計点の平均値」とありますが、この数値は、全児童生徒の体力合計点の平均値です。体力合計点とは、表にある「握力」から「ソフトボール投げ」までの8種目の記録を10段階（1～10点）でそれぞれ点数化し合計した、いわゆる絶対値で、満点は80点となります。

それでは、結果の概要につきまして、ご説明いたします。

まず、実技に関してですが、資料1の左側、小学校についてです。

男女とも体力合計点の平均値は、全国平均値と比較すると低い状況で、昨年度よりもやや下回っております。

種目別に見ますと、男女とも握力が全国平均をやや上回っており、男子はソフトボール投げもやや全国平均を上回っております。また、昨年度と比較して、男子では4種目、女子では2種目のT得点が高くなっております。

次に、右側の中学校についてですが、男女とも体力合計点は、全国平均値と比較すると低い状況で、昨年度よりもやや下回っております。

種目別に見ると、男女とも全国平均を上回っている種目はありませんが、昨年度と比較して男子は4種目、女子は1種目で、得点が高くなっております。

資料下段のレーダーチャートをご覧ください。

これは、種目別のT得点について、全国と札幌の値を比較したもので、青が全国、赤が札幌市を示しています。全国と比較しますと低い状況の種目が多く見られます。

中学校については、特に女子が依然全国平均との差が大きい種目が多いのが現状です。

小・中男女ともに、レーダーチャートの右下あたりの全身持久力につながる20メートルシャトルランや持久走、敏しょう性につながる反復横跳びが、他に比べて開きが大きくなる傾向が続いております。

次に、資料2-1をご覧ください。

これは、小学校の種目別平均値について、札幌市と全国及び北海道の値の経年変化を表したものです。資料の左側が男子、右側が女子となっております。青の点線が全国、オレンジの実線が札幌市の平均値を示しています。また、平成29

年度から公表されております札幌市を除く北海道の平均値につきまして、灰色の実線で示しております。

男女それぞれ右下、太四角で囲んでいる体力合計点のグラフをご覧ください。

今年度は、札幌市はもとより、全国的に低下傾向が見られます。また、女子よりも男子の方が大きく低下しており、本市も同様です。それぞれ個別の種目においても全国、北海道、札幌市いずれも低下傾向にあります。

続いて、資料 2 - 2（中学校）をご覧ください。

こちら、小学校同様、全国、北海道、札幌市いずれも、男女ともに下の太四角で示した体力合計点を初め、各種目の値についても軒並み低下しており、女子よりも男子の方が大きく低下しています。

また、実技の状況の全体的な傾向として、小・中男女ともに、札幌市を除く北海道の結果と比較しますと、札幌市が下回っております。

これは、全国的な傾向として、大都市及び中核市の結果は、その他の都市や町村、へき地を下回る傾向が見られております。これは、都市の規模や立地などによって子どもたちの生活スタイルが異なることが影響しているものと思われま

次に、資料 3 の児童生徒質問紙調査の結果の経年変化をご覧ください。

左側が小学校、右側が中学校の結果です。赤い折れ線グラフが全国、棒グラフが札幌市を示しており、青が男子、オレンジが女子です。

上段の「運動やスポーツをすることが好き」、中段の「体育の授業は楽しい」と考える子どもの割合は、小・中学校、男女ともに、全国と比べて、ほぼ同程度を維持しており、意識の高さがうかがえます。

また、下段の体育の時間を除く 1 週間の総運動時間が 60 分未満の子どもの割合につきましては、全国平均と比較すると、小学校は男女ともにほとんど運動をしない子の割合は低いものの、中学校では逆に増加するという傾向が見られます。ほとんど運動をしない子どもを減らすための取組が求められると考えております。

最後に、資料 4 をご覧ください。

これは、札幌市の児童生徒における体力合計点と特定の項目との相互関係を明らかにするクロス集計結果をあらわしたものです。

上段のグラフは、体力合計点と運動の好き嫌いの関係を示しています。ご覧のとおり、小・中男女ともに、運動が好きと答えた児童生徒の体力合計点が高い傾向があります。グラフにはありませんが、「体育・保健体育の授業が楽しい」という項目にも、ほぼ同様の結果が見られました。

中段のグラフは、体力合計点と体育の時間を除く 1 週間の総運動時間との関係を示したものです。こちら、小中男女ともに、運動時間が長いほうが体力合

計点が高い傾向が顕著に見られます。

一番下段のグラフは、体力合計点と平日のテレビやDVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコンなどの画面を見ている時間、いわゆる「スクリーンタイム」との関係を示したものです。小・中男女ともに、スクリーンタイムが増加するほど体力合計点が低くなっておりませんが、他の二つのグラフと比較すると、各項目間の差が小さい傾向が見られます。

以上が今年度の調査結果の概要となります。

教育委員会といたしましては、今年度、小・中男女ともに体力、運動能力が低下したことを重く受けとめまして、国の議論を注視しつつ、調査結果を踏まえた方策を講じ、次年度のさっぽろっ子「健やかな体」の育成プランを策定していきます。

なお、次年度のプランにつきましては、今年度中に改めてご報告いたします。

具体的には、北海道教育大学札幌校と連携して今年度から実施しております、子どもの体力向上に係る調査研究に基づきまして、体育の毎時間の授業で行う準備運動等として、楽しく継続的に持久力や敏しょう性を高める運動を考案しております。また、特に中学生の運動機会が少ない要因を明らかにする調査と、その結果に基づいた新たな方策の立案や、東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機とした、なわとび運動を初めとする運動機会の創出を促す取組などを実施していきます。

また、「運動が好き」「体育の授業が楽しい」と考える児童生徒の割合が高いという特徴を生かしながら、体育や保健体育の授業改善に取り組むとともに、学校のさらなる運動環境の整備など、体育の時間を除く運動時間を増やすことにもつなげていく取組も進めて参りたいと思います。

私からの説明は以上であります。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明に対しまして、ご質問等がございましたらお願いいたします。

○石井委員 今回の結果を受けて、今年も全国平均を相対的に下回ったという結果が出たことは非常に残念なのですけれども、最近の子どもたちの傾向として、やはり、運動不足によって健康被害が出ているということが保護者の周りでも話題になっております。例えば、子どもの体のゆがみや、腰痛なども最近の子どもには出ているということで、運動不足による体力の低下のために健康被害が出ているということは非常に問題ではないかと思えます。

全国平均と比べると、グラフを拝見したときに何が違うのかというと、スポー

ツや運動することが好きという割合や体育の授業が楽しいというのは全国と余り変わらないのですが、多少低いのが運動をしている時間です。小学校のときは札幌のほうが運動している時間が若干長いのですが、中学校になると、体育の時間を除く運動の時間が若干少ない傾向にあります。先ほど、運動をしない子を減らす取り組みが必要ということで、今後、教育大と連携して楽しく運動していく取り組みをしていくという話もありましたけれども、今でも運動やスポーツをすることが好きという子がいますし、体育の授業は楽しいと言っている子がいるので、それからさらに一步進んだ取り組みが必要ではないかと思えます。やはり、ただ好きだったり楽しいだけでは継続して運動していかないと思うのです。体力の低下や運動不足は何がいけないのかということは、子どもたちにも啓発していく必要があると思っていて、体力が落ちることによって、体がゆがんで疲れやすくなったり、病気になる確率も上がるということ、小学生なり小さいときから教えていく必要があるのではないかと思っています。

ただ好きだったり楽しいということだけでは、これから先、全国平均を上回るという結果が出ないのではないかと思っていて、教育の中で運動習慣は大事だということを教えていくと。

さらに、幼少期だけではなくて、大人になっても取り組んでいってもらえるような啓発をしていただきたいと、今回の結果を受けて思いました。

○学校教育部長 子どもの体力向上自体、さっぽろっ子「健やかな体」の育成プランの中にあることですので、今、委員からご指摘がありましたとおり、単に運動をすればよいということではなくて、それが健やかな体の育成につながっていくというところにうまくつなげていながらということを進めていきたいと思えます。大学と協力しながら、一定程度、学問的な研究の背景を持ちながら、より効果的な方策をさらに検討していきたいと思えます。

○阿部委員 資料3ですけれども、全体的に見て、中学生の女子が全国平均に比べるとかなり顕著な数字になっております。資料3にありますように、中学生の男子も女子も、スポーツをすることは好きだけれども、楽しいかどうかというところにおいては、全国平均を少し下回っております。先ほど部長からもお話がありましたように、中学校の授業の改善というものがここに数字としてあらわれているのかなと感じました。

また、我が子のことを振り返ってみますと、小学校のうちは、体育の授業があるときは朝から楽しげなのですが、中学になると、ちょっと憂鬱な感じなのですね。そこがこういう数字にあらわれているのかというふうに見たときに、楽しさ、イコール、健やかな体の健康づくりにもつながっていくのかなと思えますの

で、今のところ、授業の改善の余地というのは、このグラフを見る限りでは結構あるのではないかと感じました。そちらは次年度の施策の中に入れ込むというお話でありましたので、特にそのあたりを強化していただくとよいかなと感じました。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

○中野委員 体育系の中学校でクラブとか運動部に入る人が減ってきているということとの関連は何かあるのですか。

○長谷川教育長 部活でしょうか。

○中野委員 運動系の部活に入る人が大分減ってきて、それと体力のデータというのは関係があるのかなと思ったのです。

○学校教育部長 部活動の加入は一定程度あるので、二極化というところがまきに出ているのかなと思います。つまり、部活に入っている子どもたち自身は一定程度の運動をしているのですが、部活に入らない子どもたちが一定数いて、その子たちの運動時間をどう確保するのかというところが課題なのかなと思います。

○長谷川教育長 二極化と、部活動総体として減っているのではないかとどうぞ指摘ですね。

○教育課程担当課長 そもそも本市の中学校の生徒の部活等の加入率が低い傾向というのはずっと続いていまして、この加入率に大きな変化はないです。

○長谷川教育長 下がってきているわけではないのですね。

○教育課程担当課長 はい。

○中野委員 本州の大都会と比べても、札幌市は部活動への加入率が低いのですね。

○教育次長 ただ、低いといっても6割から7割は入っています。他都市は、全員が強制でというような都市もあります。

○長谷川教育長 強制はできないと思います。

○教育次長 そうなのですけれども、実際に入っていない子どもたちも、外のサッカーのクラブチームに入っているとか、水泳を習っているという子どもたちもいますので、一概に札幌が極端に低いというわけではないです。

○阿部委員 文系の部活に入ると、体を動かすことはほぼなくなって、体を動かすのは体育の時間しかなくなってしまおうというのがこのグラフに若干あらわれているのかなと感じるのですが、そのあたりはいかがですか。

○長谷川教育長 文系の対抗戦はやっていませんでしたか。

○学校教育部長 やっています。文化系の子どもたちの運動大会というものをやって、運動する機会をつくりましょうということはやっています。

それから、文化系の部活でも、吹奏楽や合唱の場合は体力づくりをやっているところがあります。

ですから、文化系の部活に入っている子どもたちは体力が低いとか運動の機会がないというわけではないと思います。

○長谷川教育長 体育系よりは落ちますけれども、今、阿部委員がおっしゃったように、そういうところでも少し工夫しながら運動する機会を増やしているというのが現状なのですね。

○学校教育部長 そうですね。

○石井委員 学校の部活動に入って運動する機会も大事ですが、中学生に入ると、自発的に体を動かす機会を設けなければいけないのではないかと私は思っています。

このグラフを見ると、小学校5年生は全国平均より体を動かす機会が日常的に多いという結果が出でいますが、それはどうなのですか。小学生で外遊びをしている機会が多いと捉えてよいですか。

○学校教育部長 そうですね。小学校の場合は、かなり工夫してまして、廊下を歩いているところでちょっと飛び跳ねようというようなポイントをつくっておいて、日常的にいろいろな形で体を動かす環境をつくるというところを工夫して

きています。そういう中で、小学生の場合は、体育の授業以外にも運動する機会が増えているという状況があります。

○**阿部委員** 小学校のうち、例えば外遊びで公園に行くという機会があると思いますが、中学生になると、公園は小学生以下の場所というように、小学生がいるから中高になってまで公園に行ったらちょっと悪いかなという雰囲気はどうしてもあるので、外遊びをするという機会が途端にぐっと減ってきてしまいます。そして、部活が始まると、帰ってくる時間も8時、9時とどうしても遅くなってきます。そうすると、余計に放課後に外で遊ぶという機会がそもそもなくなってきますので、石井委員がおっしゃったように、子どもたちが自発的に室内で運動するとか、そういう機会を醸成していくということはすごく大事で、中学になってからいきなり運動が大事だよと言われても、ライフスタイルの中に入っていないとぴんとこないのです。子どものうちから体を動かすことが一つのライフスタイルなのだということの意識醸成は非常に重要だと感じました。ずっと体を動かさないでいると、それが習慣化されてしまうので、体を動かすことが習慣化されるというところを醸成していくことは大事だと思います。

○**道尻委員** 今のお話とも関連するのですが、これからやる調査の中で、体育の時間を除いて運動されている方がどういう機会にどういうことをされているのか、一つ参考になると思うので、運動部なのか、運動部以外なのか、それ以外の機会を設けているのか、その辺がわかってくるとよいのではないかと思いますので、そういう観点も入れていただければと思います。

○**長谷川教育長** ありがとうございます。

いずれにしても、体力は全ての基本になる場所なので、頑張ってやっていかなければいけないと思います。よろしく願いいたします。

◎**報告第2号 令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』育成プラン」について**

○**長谷川教育長** 続きまして、報告第2号 令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』育成プラン」についてであります。

事務局から説明をお願いします。

○**学校教育部長** 学校教育部長の相沢でございます。

令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』の育成プラン」についてご報告させていただきます。

令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』の育成プラン」をご覧ください。A3判

横のカラー3枚ものとなります。その後にある白黒の資料は、平成31年度版のプランです。改訂点の確認のためにお配りしておりますので、適宜ご覧いただければと思います。

本プランは、札幌市教育振興基本計画における基本施策に位置づけているものでありまして、学校の授業における学びの質を高めるとともに、学校と家庭が一体となって「学ぶ力」を育むことを目的に、平成26年度から作成、実施してきているものです。

毎年、全国学力・学習状況調査や札幌市が独自に実施している「20項目の子どもの自己評価アンケート」等の各種調査結果を分析し、札幌市の子どもの「学ぶ力」に関する成果と課題を明らかにした上で改訂を重ねてきております。

各学校では、教育委員会から示された本プランを基に、自校の学ぶ力の育成に係る成果と課題を踏まえて、次年度の「学ぶ力」育成プログラムを作成し、実践しております。

まず、今年度の各種調査から明らかになっている札幌市の子どもの学ぶ力に関する成果と課題についてご説明いたします。

資料2枚目の参考1をご覧ください。

ここには、各種調査から分かる札幌市における子どもの学ぶ力の現状について記載しています。

これは、これまでの教育委員会会議においてご報告してきたものをまとめたものですので、本日、詳しい内容の説明は割愛させていただきます。

次に、資料3枚目の参考2をご覧ください。

こちらは、毎年12月に、小学校5年生、中学校2年生の全児童生徒を対象として実施している、子どもの自己評価アンケートの今年度の結果となります。左下の「成果」にあるアンダーライン部分をご覧ください。

調査初年度の平成25年度に比べ、令和元年度は、小・中学校ともにほとんどの設問について、肯定的な回答の割合が高くなっております。自ら課題をもち、互いに考えを伝え合いながら思考・判断し、課題を解決しようとする子どもが増えてきておりまして、各学校において、課題探究的な学習を推進するなどの授業改善が進められている成果と捉えております。

また、特に中学校におきましては、グラフの上から4番目にあります「意見の違う人とも、よく話合おうとしている」の項目で、調査初年度と比較しますと、16ポイントという大幅な上昇が見られます。中学校における授業改善が進むとともに、小学校段階から連続性のある「学ぶ力」の育成に取り組んできた成果であると捉えております。

一方で、右下の欄にある「課題」ですが、グラフの上から8番目、ふだんから計画を立てて勉強しているという子どもや、12番目の授業中、自分の意見を進んで

発言している子どもの割合は、調査初年度に比べまして肯定的な回答をする割合は高くなってきているものの、他の項目に比べるとまだ低い傾向が続いております。

さらに、差は縮まってきているものの、小学校に比べ、中学校の肯定的な回答の割合が低い項目も見られることから、小学校で身につけた力を中学校で一層伸ばしていけるよう、両校種が互いに授業を見合い、指導の方法等について協議したり、目指す子ども像を共有したりするなど、協働的に「学ぶ力」の育成に取り組むことが必要と考えております。

以上のことを踏まえて、令和2年度「さっぽろっ子『学ぶ力』の育成プラン」の特に改訂した点をご説明させていただきます。

資料の1枚目にお戻りください。

赤枠で囲んだ①と②が改訂点となっております。

まず、①についてです。

令和2年度から、小学校では新学習指導要領が全面実施されますが、その総則においては、幼小、小中、中高などの円滑な接続を図る学校段階間の接続の必要性が明記されております。今年度の学ぶ力の育成プランにおいても、校種間・学校間の連携による教育活動の充実を位置づけ、小中一貫した教育の視点から連続性のある教育を推進してきているところではありますが、現在、策定を進めている「小中一貫した教育基本方針」を見越して、「『小中一貫した教育』の実践による系統性・連続性のある教育の推進」と、さらに一步踏み込んだ表現といたしました。

具体的には、義務教育9年を見通して子どもに資質・能力を育むため、小中学校のつながりの視点で教育課程を工夫改善したり、「学ぶ力」育成プログラムを活用し、小・中学校で「学ぶ力」育成に向けた取組の成果と課題を共有し、指導方法の工夫改善につなげたりするなど、学びの系統性・連続性を一層重視した取組を進めてまいります。

次に、②に示したように、「ICTを活用した学習活動の充実」を新たに位置付けました。

新しい学習指導要領におきましては、知識の理解の質を高め、資質・能力を育む主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、ICTを活用した学習活動の充実が盛り込まれました。また、昨年6月には、学校教育の情報化の推進に関する法律が施行され、ICTの活用により、次代の社会を担う児童生徒の育成に資するという教育の方向性が示されました。

これらの国の動きを踏まえ、札幌市といたしましても、授業等のさまざまな場面でICTを一層効果的に活用することを、「学ぶ力」の育成の手だての一つとして、今後、充実させていくことが重要と考えております。

そのほかにも、課題探究的な学習について、今後一層充実を図るために、小学校で令和2年度から使用される教科書の内容に合わせて作成します「札幌市教育課程編成の手引－小学校編－」を配布し、効果的な活用等について支援してまいります。

また、昨年度に引き続き、各学校の「学ぶ力」育成プログラムに、「さっぽろっ子「学び」」のススメを活用して、学校と家庭が連携して学習習慣づくりを進めるための方策を位置づけることについて明示しました。

子どもの学習習慣の確立には、学校以外の場面においても、子どもが学校で学んだことを生かして自ら学ぼうとする意欲が高まるような授業へと改善を進めることが重要です。併せて、学校と家庭が一体となって子どもの習慣づくりを支えていくため、「まほうのかいわ」を意識した子どもへの働きかけ等について具体化して取り組めるよう、各学校に保護者説明用プレゼンテーション資料を作成・配付するなどして支援してまいります。

以上、令和2年度の「学ぶ力」の育成プランについてのご報告とさせていただきます。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明に対しまして、ご質問、ご意見等がございましたらお願いいたします。

○佐藤委員 改正点については理解いたしました。だんだん項目が多くなっていく中で、工夫されて挿入されていると思います。

資料3の細かい部分ですが、伸びたところについては、札幌市の課題探究的な学習がだんだん効果を発揮してきていると思います。つまり、ディスカッション部分に相当楽しみを感じる子どもたちが多くなっているというデータだろうと思います。

ただ、ご指摘がありましたように、ふだんから計画を立てて勉強をしているという8番の項目が、小・中学校とも思いのほか低いのは危惧されることではないかと思えます。同じように、それほど目立ちませんが、項目5の今の自分にとってどのように勉強するのがよいかわかっているというところも、もうちょっと高くなければいけないのではないかと思えます。つまり、ディスカッションして、クラスの同級生と一緒に自分の認識を高めていくためには、やはり基礎となる知識が必要だと思えますので、その部分は、自宅での学習計画を立ててというところが大事になってくると思います。ここの数字が低い理由というか、恐らく、教室の先生方は、こういうふうには計画を立てていくのだよという学習プランの立て方は教えていらっしゃると思いますが、どうして中学校で35%という低い数字な

のか、もしおかわりになるところがあれば教えていただきたいと思います。

○**学校教育部長** 小学校と中学校の差のところていくと、ふだんから計画を立てて勉強するという捉え方の違いがあると思います。中学生くらいになると、本来、こうやらなければいけないという自分なりの理想の姿に対して、まだまだ自分はできていないというところ、その自己評価に対する思いが出ています。その点での発達の段階の質問の捉え方の違いはあると思います。

ただ、そういうところを踏まえたときに、この中でどこまでを求めているのかというところが、学校の中で、あるいは、私たちの間の整合性が必要になってくると思います。

○**佐藤委員** もしかしたら、8の項目を立てた計画がどれだけ実現されているかという達成度と混同されている可能性もありますか。

計画を立てて勉強するというのは、それが実現されなくても計画を立てれば、それでこの項目の高いところを見つければよいわけで、無計画に勉強しているわけではなさそうな気がします。

実際に中学校での指導というのは、勉強の計画はこういうふうを立ててとか、1週間ごとにとか、1カ月ごとにとという話は皆さんされているのですね。

○**学校教育部長** ある程度はですね。

○**児童生徒担当部長** 中学校の認識の違いでいいますと、中学校は定期テストがあるものですから、その前に定期テストの計画表というのはどこも配っておりまして、10日から2週間くらいまでの定期テストまでの勉強計画というのは詳細に作成していますので、子どもたちにとっては、その計画は綿密につくるのだけれども、ふだんからあれほどの計画をきちんとつくってやっているかと言われると、そんなにはやっていないということで、その認識の違いはあるのではないかと思います。

○**長谷川教育長** 小学校の教科書は、自分の生活をこういう計画を立ててやりましょうという中身に入ったりしていますね。それが中学校に入るといきなりなくなってしまうときに、学校でどこまでフォローしているかというところもあると思いますが、そこはどうでしょうか。小学校のように、きちんと毎日の生活の計画を立てて過ごしましょうということは余り言わないでしょうか。

○**児童生徒担当部長** 中学校では、毎日の放課後の生活記録票をつけるように取り組んでいる学校がかなり増えております。放課後に帰ってから、ご飯をいつ食べて、きょうは何をしてという記録をつけている学校は多いのですが、小学校のように家庭学習などの手厚さで言うと、子どもたちに任されている部分がやや多いと思います。

○**長谷川教育長** 先ほど佐藤委員がおっしゃったように、プランをつくるのと、プランを達成したというのを混同した形での回答も結構あるということですね。

○**阿部委員** 先ほどのスクリーンタイムですが、中学校になると、スマートフォンを持つお子さんが増えてくるので、我が子を振り返ったり、周りのお母さんの話を聞くと、計画を立てるというより、まずは自分のやりたいスマートフォンで友人と会話をしたりというところを優先していて、それから、残った時間を勉強に充てるというライフスタイルが中学生になるとかなり変わってきたりするので、そういう結果として、小中でこれだけの差が出ているのかなという感じがしますが、そのあたりはどうですか。

○**教育課程担当課長** 自分の時間を自分でコントロールすることの大切さは、教育委員会から学校を通じて生徒に周知、啓発するように取り組んできていますが、今、委員がおっしゃったように、自分のやりたいことが増えてくる成長の段階ですので、子どもにどれくらい任せているのか、保護者がコントロールする部分があるのか、そのバランスがうまくいっていないのかと思います。

20項目ありますけれども、高くなったまま推移しているものもありますので、そろそろこの項目も検討し直していこうかということも考えています。そのときに、ふだんから計画を立てて勉強しているというメッセージについては、もう少し検討して、子どもたちにどういうことを大切にしてほしいというのが我々のメッセージなのかということを知りやすく伝えるような工夫もしつつ、アンケートをとるということが必要ではないかと感じました。

○**阿部委員** そうですね。社会に出ると、仕事を進めるに当たって、1年間、どういう計画を立てていくのかということと、1か月、1週間、1日単位ということで、細かくタスクを計画していかないと、結果的に仕事のゴールに合わせて仕事ができない社会人が今は非常に増えてきて、それは経営者の一つの悩み事でもありますので、小学校・中学校のうちから計画を立てることが習慣付けできると、札幌市のお子さんが社会に出たときに、そこについては困らないような状況にしていただけるとよいと思います。この数字を見る限り、危機的な状

況だなと感じておりました。

○**教育課程担当課長** 子どもが大変忙しいということで、大人の忙しいのかもしれないませんが、情報がすごいスピードでさまざまな情報が入ってくるものですから、そういう意味では、情報に追われないで、それを自分からコントロールする上でも、計画性というのは大事な力になるなと思いました。

○**石井委員** 今、自分でコントロールするというお話が出ましたが、それも自発性だと思うのです。さきの体力テストのところでも言ったのですが、中学生になると、どれだけ自分で行動を起こすかというところで、やる気やパーセンテージも変わってくると思うのです。ふだんから計画を立てて勉強しているというところで、定期テストに向けてだったり、ふだんから自分で違うプランを書かせているというお話もあったのですが、それが学校から提示されたものだったら、やらなければいけないものとして子どもたちに捉えられているとしたら、自分で計画を立てて検討しているかというところ、あれは自分で計画しているものではなくて、学校から言われてやっているものだからというところで、ちょっと肯定的に捉えることができない子どももいるのかなというふうはこのグラフを見て思いました。

小学校のときだと、親だったり、大人から言われたからやったということも、自分でやったということで肯定的に返事ができると思いますが、中学生になると、学校から言われたことだからだとか、親から言われたことだから自分でやっていないという気持ちがこのグラフにも出ているのではないかと思っています。子どもたちに自発的にやらせるというところも非常に大切なのではないかと考えております。

計画を立てて勉強しているという項目も低いですし、授業中、自分の意見を進んで発言しているというところも自発性だと思うのです。自分で意欲的に取り組んでいるかという姿勢のあらわれだと思いますので、勉強の計画や、ふだんの生活の計画もそうなのですが、学校で促したり、保護者が促すということもそうですが、先ほど阿部委員もおっしゃっていたように、幼少期からの習慣付けをしていく、自分でやっていこうと思うような気持ちを育ててほしいなと思いました。

○**長谷川教育長** ほかはいかがですか。

○**中野委員** こんなことを言ったら話をぶち壊すかもしれませんが、計画を立てる目標が低ければ、当然、計画は達成できますね。ですから、計画を立

てて、低い目標で達成するほうがよいのか、計画は余りはっきりしませんけれども、成果が高いほうがよいのかという話をごちゃ混ぜになってしまうので、ある程度とか自らとかいろいろと前提をつければ、これは相当変わりますでしょう。ふだんから自分で計画を立てて、試験期間にかかわらずずっとやっているというふうにとると、かなり低くなるのは当たり前かと思います。ですから、夏休みとか試験期間中は、そこそこの計画を立てていると思いますが、それ以外のところはやっていないのだから、入らないのだという受けとめ方は当然あります。

ですから、漠然としているというところで丸を付けづらいというところがあるのかなと思います。

ですから、1時間で勉強計画を立てるのと、計画を立てないけれども、3時間勉強するというので、どちらが成果があるかという、何とも言えないわけです。ですから、計画を立てること自体が目標だというふうにとってしまうと、丸を書きづらいと思います。設問によって変えるというのであれば、その辺はもう少し答えやすいようにつくったほうが実態がわかると思います。

○長谷川教育長 先ほど事務方からも話があったように、設問の中身を答えやすいというか、我々がどういうことを聞きたいかということをはっきり書いてくれるような項目立てが必要だと思います。

○阿部委員 以前から注目しておりました「まほうのかいわ」についてお伺いしたいのですが、当初から、これをつくるに当たって、これが家庭でどれくらいツールとして使われているのか、その辺に注目していました。今後はこちらを推進していくということだと思うので、現状として、これが家庭でどのような使われ方をしている、どんな効果を発揮しているのか、事務局で押さえている情報があればぜひ教えていただきたいと思います。

先ほど、ご家庭向けのプレゼンテーション資料をおつくりになっているということだったので、それはすごくよいなと私も思うのですが、その辺の情報を教えていただきたいと思います。

○教育課程担当課長 具体的には、各学校でちょっとずつ色合いが違いますけれども、まず、学校だよりに「学び」のススメはぜひ使ってくださいということに掲載していただくことが多くなりまして、大分なじんできております。

懇談会等で保護者に「学び」のススメを使った関わりについて、もうちょっと具体化して、どんなことがよいのかというのは保護者の方が悩むようですので、そんなものを懇談会で話題にする学校も出てきております。いろいろな取組はしてきていると感じています。

また、PTA主催の研修会等に私たちの指導主事を招いていただいて説明させていただくということが出てきています。私が現場で感じた実感としては、保護者は割と共感することを意識してかかわっているのだけれども、なかなか子どもに伝わっていかないという悩みを持ち始めているので、そのあたりは、どんな関わりをしていったらよいのか、もっと具体化した、保護者として子どもへの関わり方を学ぶ機会を、これは教育委員会が主催したフォーラムもやったことがあったのですが、各学校でそういう場をもつていただくことで、保護者が家に帰って子どもへの関わりを考えるきっかけになるようにこれを使っていくということをもっとやっていきたいと思っておりますし、少しずつ、そういう例が出てきています。

○阿部委員 裏面の黄色の枠で囲まれている三つですが、今、私は企業研修のコーディネートをしています、どんなところに課題がありますかと聞くと、筆頭はコミュニケーションなのです。社内間のコミュニケーションだったり、社外の方とのコミュニケーションということで、一番上の「しなさいのメッセージより背中を押すメッセージ」というのは、まさにコーチングのスキルが必要で、次のアイメッセージは、アサーティブコミュニケーションというスキルが必要で、全体的に物すごくレベルの高いコミュニケーションをここに書いてあるのです。一般の社会人の人たちもすごく悩んでいることを各ご家庭の保護者の方にやって見て下さいねとメッセージで発信しているので、改めて読むと、すごくスキルの高いことをここに書いてあるのですね。

ですから、プレゼンテーションをされるときに、お母さんやお父さんが継続してできるということがすごく大事だと思いますので、今、佐藤委員がおっしゃったように、やりたいのだけれども後が続かないということは、やらなければいけないということは保護者の皆さんはわかっていると思っておりますし、それが子どもとのコミュニケーションだということもわかっていると思っておりますが、手法がわからないということだと思います。そこをプレゼンテーションのときにアドバイスを保護者の方にお伝えしていただくと、またちょっと違うと思っております。

せっかくなつくっているツールですし、私としても、うまくご家庭で活用していただければよいと思うのですが、活用されていないということも現実に見え隠れしているので、その辺の伝え方を慎重にすることで、もっと伝わっていくかなという印象をもちました。

○教育課程担当課長 ご意見を踏まえて。

○道尻委員 資料1の育成プランのデータを拝見しての感想ですが、①と②の

赤字のところを加わった形になっていると思います。

I C Tの活用や小・中連携のパートナーを基本単位とした取り組みということが昨年度のものにつけ加わった形になっています。

恐らく、これまで関連する取り組みがあつて、それに対する新しい手法や新しいものをつけ加わっていくという印象だと思いますが、単純に新しいものを書きくわっていくと、この表がどんどん複雑になって、情報量が過大になっていて、やや負担が増える形にも見えなくなっていくところがあります。

そうすると、今、一方で問題になっている働き方改革で教職員の方の業務量を適正なものにしようという流れとも一致しない面も出てくると思います。単純に新しいものをプラスするという趣旨ではなくて、もちろんこれまでのプラン、取り組みにそれを合わせた形で新しいものやっていくというのが実態だと思いますが、そこのところをうまく表現する工夫がとれないのか、この先の年度以降になるとは思いますけれども、ご検討いただければなというふうに感じました。

○**学校教育部長** 確かに、新しい取組が増えて、負担になるというのは本意ではないので、これを学校に説明していくときに、I C Tについては、今年度でいくと右下のその他のところに入っています。今までやっているところをさらに意識してやっていきたいと思いますということはこちらにもってきたのですとか、そんな話をしながら、無理に何かをプラスということではなくてという中で伝わっていくだろうと説明していきたいと思います。

○**長谷川教育長** 見せ方も、少しめり張りをつけて見せていったほうがよいと思います。盛りだくさん過ぎて、文字の圧力がすごいですね。その辺も委員のご意見を踏まえながら検討していきましょうか。

○**学校教育部長** わかりました。

○**長谷川教育長** それでは、ほかになれば、報告第2号につきましては以上であります。

◎**議案第1号 札幌市立義務教育諸学校における学級編制について**

○**長谷川教育長** 続きまして、議案第1号 札幌市立義務教育諸学校における学級編制についてであります。事務局から説明をお願いいたします。

○**教育推進・労務担当部長** 教育推進・労務担当部長の早川でございます。

私から、議案第1号についてご説明します。

本議案は、本市の学級編制に係る基準日を、特別支援学級について、通常の学級の基準日に合わせるという、改正を行うものであります。

まず、議案のインデックスの別紙をご覧ください。

最初にありますとおり、いわゆる地教行法及び義務教育学級標準法に基づきまして、公立の小学校、中学校並びに特別支援学校小学部及び中学部の「義務教育諸学校」の学級編制につきましては、平成29年の県費移管によりまして、本市で定めることができるようになったところであります。

次に、インデックスの新旧対照表をご覧ください。

現在、札幌市立小・中学校につきましては、左の現行にあるとおり、通常の学級は4月1日、特別支援学級は4月10日をそれぞれ基準日として、この基準日における児童生徒数に基づき学級編制を行い、この学級数から教職員の定数を決定しております。

実際には、新年度の体制は4月1日から始まることから、一旦、3月に児童生徒数の見込みに基づき、職員の定数を仮置きし、配置するものであります。

転出入等の理由により、基準日時点において児童生徒数に増減が生じた学校につきましては、必要に応じて追加配置を行っており、通常の学級は4月5日前後、特別支援学級は4月12日前後に期限付教員を配置しております。

このため、特別支援学級につきましては、期限付教員の追加配置が入学式や始業式の後となるため、一時的に学級担任が不在となる他、校内体制の整備が遅れる等、学校現場における課題が多い状況にあります。

そこで、これらの課題を解消するため、特別支援学級の基準日について、通常の学級と同じ4月1日に変更いたします。

これにより、期限付教員の追加配置について、入学式や始業式より前の4月5日前後に行うことが可能となります。

本件の説明は以上であります。

ご審議のほど、よろしく願いいたします。

○長谷川教育長　ご質問、ご意見等がありましたらお願いいたします。

○佐藤委員　従来、特別支援学級が4月10日になっていた事情や理由はどのようにことだったのですか。

○教育推進・労務担当部長　もともと県費移管前は北海道の基準が札幌市にも影響されていたということですので、北海道がどうしてこのような基準を定めたかということ再度確認したところでもありますけれども、北海道教育委員会としては、かなり昔の話ということもあり、詳細な事情は不明という回答でした。

ただ、これは推察ですが、道教委におきましては、全道を対象として人事配置

対応を行っているところでありますので、その広域性や4月当初の規模感を考えますと、時期を2回に分けているというふうに推察されます。

○佐藤委員 これは、特別支援学級にとっても、通常学級と同じ4月1日にまとめて特に困ったことは起きないという解釈でよろしいですか。

○教育推進・労務担当部長 かえってよくなるということで、今回も県費移管のときは北海道の基準を余り大きく変えると現場も混乱するというので、できるだけ混乱が起きない形で推移したところですが、3年たちましたので、ある程度、状況が落ちついたということで、見直しを行おうという判断です。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、これについてはよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、議案第1号につきましては、提案どおりと決定させていただきます。

議案第2号から第6号までは公開しないことといたしますので、恐縮でありますけれども、傍聴の方につきましてはご退席をお願いいたします。

[傍聴者は退席]

以下 非公開